

～アメリカ南部の歴史ある街、チャールストンに留学して～

野口 淳史 (北大 84 期)

私は膠原病グループの大学院生として 3 年半を過ごしたのち、休学という形で 2015 年 10 月から 2017 年 9 月までの 2 年間、アメリカ南部のサウスカロライナ州、チャールストンにある Medical University of South Carolina (MUSC) に留学いたしました。

チャールストンは、日本人には馴染みが薄いですが、南北戦争の勃発した地として知られています。人種差別の歴史は根深く、南部独特の雰囲気はアメリカの中でも異国の世界といえるかもしれませんが、実は観光地としてとても人気があり、真夏の太陽の下で燦然と輝く青い海、絵の中にいると錯覚するほどの美しい庭園、その魅力あふれる景観に似つかわしいエレガントな住宅街など、どれをとっても一級品です。また南部の人々は、日本でいう「おもてなし」の情に厚く、Southern Hospitality と呼ばれています。日本人の少ない中、生活のセットアップには苦労しましたが、現地の方々の優しさ、親切さにどれだけ救われたかわかりません。また、気候はとても温暖で、真冬でも雪は全く降らず、それまで道外に住んだことのない私にとっては毎日が新鮮で驚くことばかりでした。

私は MUSC の Rheumatology & Immunology のラボに所属し、Richard M. Silver 教授、直属の上司である Galina S. Bogatkevich 准教授のもとで強皮症の間質性肺疾患の線維化メカニズムの解明に取り組んでまいりました。線維化に対して抑制的に働く HGF とその受容体である c-MET によるシグナル経路に着目し、c-MET のチロシキナーゼドメイン C 末端のフラグメント（ペプチド）を用いて抗線維化作用を検討するのが主な仕事でした。「線維化」をテーマにしたラボが Department の垣根を越えて 1 つのフロアに集まっているため、日々お互いに知識や技術を共有しつつ、また物品の貸し借りもしながら助け合っていました。競争の意識がとりわけ高いとは言えませんが、私にとっては都会のやや殺伐とした空気と比べると大変居心地の良い環境でした。

プライベートでは、アメリカ人のご家族が海外からの留学生を対象にホームパーティーを何度も開いて下さり、おかげで多国籍の人たちと知り合うことができました。人種も宗教も異なる仲間同士で語り合うのはとても素晴らしい体験であり、異文化を知る機会としてとても良い刺激になりました。

最後に、大学院生という立場にありながらこのようなかけがえのない経験をさせていただき、渥美教授をはじめ第二内科のスタッフの方々のご厚意、そして仕事を引き継いで下さった大学院生、医局員の皆様のご配慮に厚く御礼申し上げます。

